

TALKABOUT



1999 JUNE・6

トークアバウト・・・第2巻第3号

街に住まう

Sの字の形した国

イカとタコ

マテララの洞穴都市

里山／保存と復元の

ミラノ

風の路

小南一郎 02

彼末れい子 03

星野康彦 07

豊辺弘也 08

林進 11

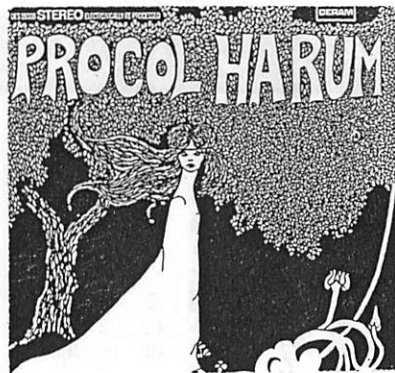
鈴木道子 12

市居博 15

1965年から1967年、ポップスを聴きまくった。おかげで音楽の道を進まなかった私の頭のかなりの部分をほとんど役に立たない知識が占拠し消える様子がない。しかし今の仕事に何か役立っているところもある。当時、微かだが確かな視角情報源としてアルバムジャケットは貴重であった。とくに購入にあたっては音楽はもちろんだが表ジャケットのデザインに関しても何度も吟味してから決めたものだった。逆に言えばどんなによい音楽でもデザインに感じなければ買いそびれてしまったことがある。それだけに一旦手に入れた時は何度眺めても飽きが来なかった。今から思えばデザイン指向の始まりだった。またポップスのおかげで少しだけ博識もついてきた。クラシックに親しめたのもこの2枚のおかげ。看板曲はどちらもバッハのリメークだが、今もオリジナルから独立して輝いている。この2枚、確か日本ではすぐには発売されなかった。プロコル・ハルムは大学後半に中古で見つけたが、当時VANの夜半のCMテーマで流れた哀愁のオルガン演奏曲「リベント・ワルブルギウス」も入っている強力盤。アール・ヌーボー、夭折の画家ピアズリー風のジャケットは当時見つけていれば何としても買っていたことだろう。トイズは残念ながら一発屋さんであった。名前の通り音楽業界のお人形さん、ようやく一昨年CDを求めたところラッキーにも再発盤をいたされた。それにしても当時の若者音楽文化の熟成度は今の比ではない。1年の違い、イギリスとアメリカのレベルの違いをこの2枚のアルバムジャケットは象徴していたのだった。



トイズ／ラバース・コンチェルト 1966



プロコル・ハルム／青い影 1967